

平城宮東院地区における 埴輪生産の契機と供給先

1 はじめに

平城第243次・第245-1次調査では、平城宮東院地区の下層において5基の埴輪窯が検出された(図15)。1号窯(SX16285)が野焼きの埴輪焼成遺構、2号窯(SX16283)・3号窯(SX16284)・4号窯(SX16286)・5号窯(SX16280)が窖窯である。これらの埴輪窯は、佐紀古墳群東群に関わる古墳時代中期のもので、1号窯が5世紀前半、2～5号窯が5世紀後半とみられている(『1993 平城概報』)。

また、平城第39次・第43次調査では、本埴輪窯の西方に位置する南北溝SD4992や方形にめぐる溝SD5700から、5世紀の土器や埴輪が大量に出土しており(『年報1967』・『年報1968』)、三者の関連も注目される。

しかし、報告された出土資料は、1号窯床面付近から出土したⅢ期¹⁾の円筒埴輪や1号窯廃絶後の埋土から出土した須恵器といった、ごく一部に留まっている(『1993 平城概報』)。したがって、佐紀古墳群東群に対する埴輪の生産・供給関係を具体的に明らかにするためには、本埴輪窯および関連遺構から出土した埴輪の実態解明が必要不可欠といえる。

(大澤正吾)

2 出土埴輪と佐紀古墳群東群との関係

今回、平城宮東院地区から出土した埴輪を観察する機会を得たところ、佐紀古墳群東群に帰属する古墳から出土した埴輪と密接に関係することを確認できたので、以下にその概要を示しておく。

ここで取りあげるのは、操業開始期に位置づけられる1号窯からの出土品と関連遺構から出土した同時代資料である(図16)。これらの埴輪はⅢ期に位置づけられるもので、Ⅱ期までさかのぼりうる資料は今のところ確認されていない。

1は1号窯の埋土からの出土である。外面にはタテハケののちに静止痕をとまなうヨコハケがほどこされており、そのハケメパターンは佐紀古墳群東群に帰属するコナベ古墳(前方後円墳：墳長約200m)の埴輪²⁾と一致することが確認できた。

2はSD5700からの出土である。外面にタテハケのの

ちに静止痕をとまなわないヨコハケがほどこされており、最上段にヘラ記号がみられる。3はSD4992からの出土である。外面に静止痕をとまなうヨコハケがほどこされており、底部の内外面にヘラケズリが認められる。この2点の埴輪にみられるハケメパターンは共通しており、さらにコナベ古墳の埴輪にも共通するものを確認できる。

4は平塚1号墳(前方後円墳：墳長約70m)の円筒埴輪(『平城報告Ⅵ』PL.107-60の上半)で、外面にはタテハケののちに静止痕をとまなうヨコハケがほどこされている。そのハケメパターンは、奈良市歌姫町に所在する赤井谷1号横穴の床面に敷かれていた円筒埴輪³⁾やコナベ古墳の埴輪と一致する。

以上のことから、ここで紹介した1号窯で焼成された可能性が高い埴輪のハケメパターンは、コナベ古墳、平塚1号墳、赤井谷1号横穴の埴輪と共通することが確認できる。このことは、これらの埴輪の製作がほぼ同時期になされたことを示している。

したがって、現状では平城宮東院地区における埴輪生産はコナベ古墳や平塚1号墳といった佐紀古墳群東群の築造開始を契機にしていると考えられよう。

(加藤一郎／宮内庁書陵部)

3 おわりに

本稿では平城宮東院地区における埴輪生産について、操業開始期の供給関係にかぎって言及した。当該地区における埴輪生産は、野焼き焼成から窖窯焼成への転換が場所を変えずになされている点で重要であり、今後はその全貌をあきらかにしていく必要がある。

本報告はJSPS科研費JP17K13574による成果の一部を含む。

(加藤・大澤)

註

- 1) 川西安幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978。
- 2) 清喜裕二ほか「小奈辺陵墓参考地 墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』62〔陵墓篇〕、2011。
- 3) 加藤一郎「赤井谷1号横穴の埴輪とコナベ古墳の埴輪」『埴輪研究会誌』16、2012。

写真出典

コナベ古墳：註2文献より転載(原品は宮内庁書陵部蔵)

赤井谷1号横穴：註3文献より転載(原品は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵)

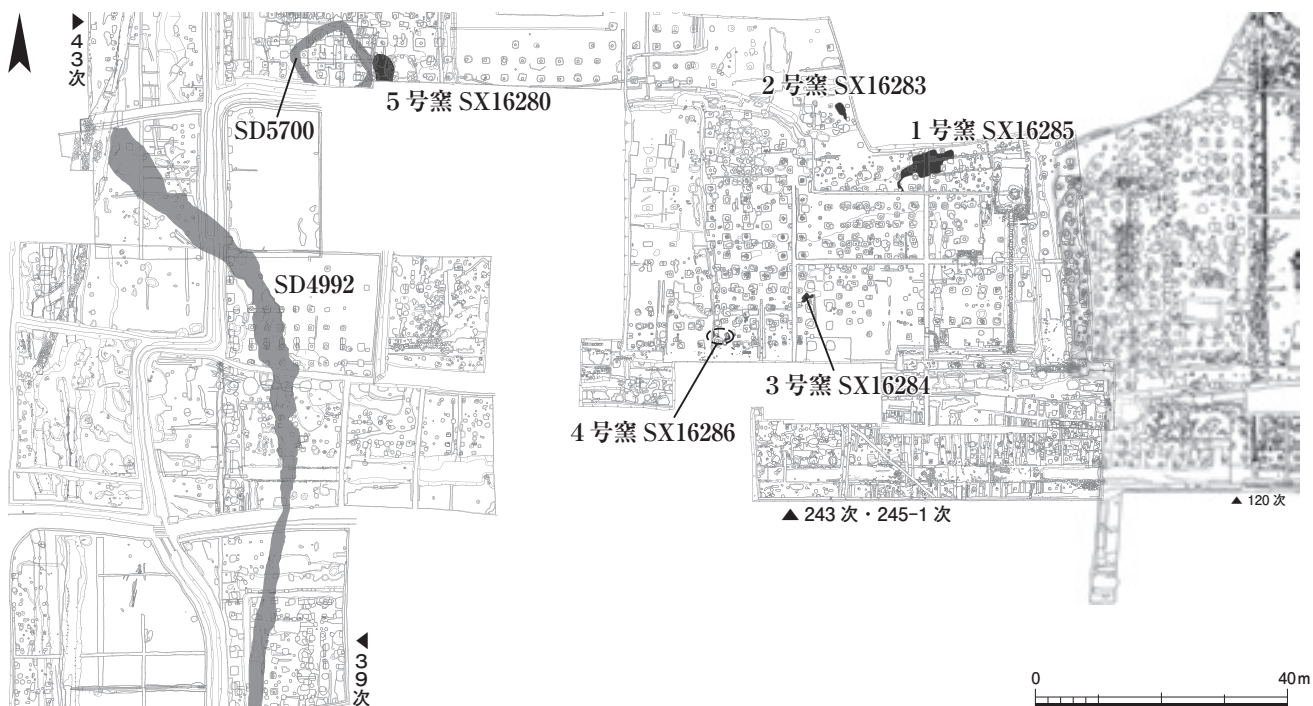


図15 平城宮東院地区における埴輪窯および関連遺構 1 : 1200

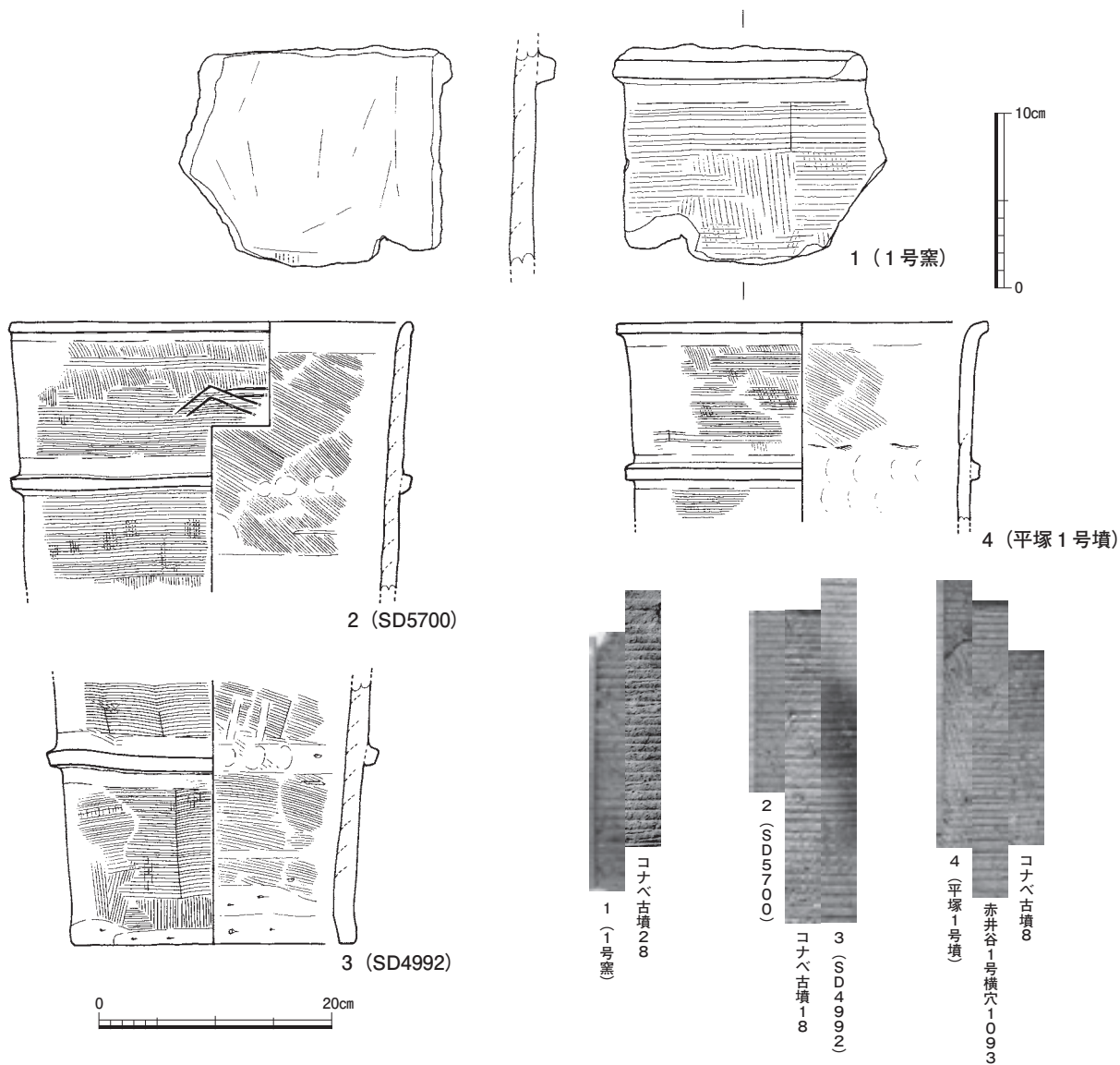


図16 平城宮東院地区出土埴輪とハケメの一致 1 : 4 (1) 1 : 6 (2~4) 約1 : 2 (写真)